

内村鑑三の生渡と事業

若き日 内村鑑三は、一八六一年（文久元年）三月、高崎藩士の子として江戸（東京）に生まれた。一八七七年（明治十年）十七歳の時、東京外国語学校（東京大学の前身）から札幌農学校（北海道大学の前身）へ官費生として入学し、同校の初代教頭クラーク（William S. Clark）の残した感化によってキリスト教を信じ、受洗した。在学中、級友新渡戸稲蔵、宮部金吾らとともに、北海道の原野さながらの素朴でうるわしい信仰生活を送り、一八八一年（明治十四年、二十一歳）抜群の成績で同校を卒業した。卒業とともに北海道開拓使御用掛を拝命し、道内の漁業の調査、研究に従事するかたわら、友人たちと札幌キリスト教会（現札幌独立教会）をつくり、熱心に伝道した。のち辞して上京し、一時農商務省に奉職したが、一八八四年（明治十七年、二十四歳）、離婚の傷をいやし、信仰上の疑問を解決すべく、私費でアメリカへ留学した。アメリカでは、まずペンシルベニア州立エルウイン児童白痴院の看護人となり、次いでアマスト大学に学び、つづさに辛苦をなめて業を終え、理学士の称号を得た。この間、同大総理シーリー（Julius H.



同僚の親友たちと。左から新渡戸稲蔵、宮部金吾、内村鑑三（1883年）

Sealey)の助言と奨励によって、ついにキリストの十字架による贖罪しよくざいの福音を信ずるに至り、まったく新しい人となった。のちハートフォード神学校にはいったが、神学教育にたえられず三か月にして退き、十字架の福音を同胞に伝えようという希望にもえて日本に帰った。時に一八八八年（明治二十一年）五月、内村二十八歳のことであった。

革新の人 帰朝後、新潟北越学館の仮教頭に迎えられたが、外国宣教師団と衝突して二か月余りで辞任し、つづいて第一高等中学校（のちの第一高等学校、現在の東京大学教養の前身）の講師となった。しかし三か月にして、いわゆる

第一高等中学校不敬事件（教育勅語の宸署に敬礼しなかったとされる）を起こして追われ、国賊の汚名をきせられ、つづいて愛妻を失い、迫害誹謗の中で文字どおり国中枕するところもない不遇に泣かねばならなかった。のち大阪泰西学館に教えたが、またもや学校当局と衝突して辞任した。こうしてついに教育事業を断念し、京都に移り住んで著述生活にはいった。この間に『キリスト教徒の慰め』『求安録』『How I Became a Christian（余はいかにしてキリスト教徒になりしか）』など、いまはずでに古典的となった和英両文の名著をつぎつぎと世に問い、キリスト教著述家としての地位を確立した。

一八九七年（明治三十年、三十七歳）の春、黒岩涙香に招かれて「万朝報」紙英文欄主筆となり、時事問題に健筆をふるった。翌年辞して、みずから評論誌「東京独立雑誌」をおこし、鋭い筆鋒をもって警世の鐘を鳴らしたが、二年のち廃刊のやむなきに至り、ついに多年の夢であった聖書雑誌「聖書之研究」を創刊し、文筆伝導に専念するに至った。一九〇〇年（明治三十三年）九月、内村四十歳の秋であった。

福音の証人 ここに内村はついに天職を発見し、天賦の資質のすべてを傾けて、天与の使命であるキリスト教の伝道を開始したのである。こののち、一九〇三年（明治三十六年、四十三歳）日露戦争にさきだち幸徳秋水らと非戦論を唱えて万朝報社の客員を辞してからは、再臨運動（一九一八—一九一九年、大正七—八年）その他でときおり市中に出ることはあったが、まったく世とはなれ俗とたち、ただひたすらに聖書の研究と福音の宣伝に努め、一九三〇年（昭和五年）三月、七十歳をもって東京に永眠するまで、三十年の間ついに変わることがなかった。

内村の伝道は、文字と文章と、雑誌と著作とをもってする文筆伝道であった。聖書の真理とキリストの福音を、一本のペンに託して、うまずたゆまず説きつづけたのであ



静子夫人とともに。鑑三33歳、夫人20歳

る。この間、「聖書之研究」は、三五七号に達し、その著書は約七十種にのぼった。この独特の伝道の結果である内村の膨大な全著作は、現在各種の「内村鑑三全集」および各種の単行本に収められて、いまなお多くの人に読みつづけられている。

「一日一生」について

本書の歴史 本書は一九二六年（大正十五年）十月にはじめて出版された。著者の生前三年半の間にすでに四版を重ねたが、第二次大戦後は、一九四九年（昭和二十四年）一月、警醒社から再刊され、その後一九五一年（昭和二十六年）十二月に角川文庫に採録された。以来着実に版を重ねてこんにちに至っている。内村鑑三の著作は、その永眠後四十年を経ずして、すでに少なくとも三回全集（著作集）が編集発行されている。そのこと事態、日本におけるキリスト著述家としては稀有のことに属するが、この本は内村の著作中でも特に広範な読者を得ているもののひとつである。事実、この本を日ごとにひもどき、毎年くり返し読みつづけている人もけっこう少なくない。

いったいこの本の何が、人をそのようにひきつけるのであるのか。内村鑑三がこんにちもなお日本人の精神の中に強い深い影響を与えつつあるのはなぜであろうか。

性格 この本は、序文に明らかなように、ボーガツキーの『宝の箱』（英訳版 Karl Heinrich von Bogatzky (1690-1774) : = Golden Treasury for the Children of God, Consisting of Devotional and Practical Observation for Every Day in the Year = 『神の子らのための黄金の箱』一年間を通じ日毎に割りあてた霊的・実感的感想集）を範として編集されたものである。ただし、『宝の箱』が一日ごとにまず聖句をかかげ、それに著者の説明（説教）と詩（讚美歌）を付したものであるのに対して、この本の編集にあたっては、まず著者の旧作中から三六六の短文を選び出し、あとからそれにふさわしい聖句を配した。したがって著作の動機はボーガツキーに負っているが、『宝の箱』とはいちじむしく趣をことにした本となっている。なお、著者の意を受けて編集の実務を担当したのは、内村の弟子で当時その伝道を助けていた故畔上賢造であっ



第3回札幌伝道の折（1912年10月）

た。

キリスト教文学の分野のひとつに *daily devotional readings*（日用祈禱説教集）とも呼ぶべきものがある。信者に日々の霊の糧を供給し、その信仰生活を助け励ますためのものであるが、『宝の箱』などはその典型であり、その中の名著であると言つてよいであろう。しかしこの種の著作には、えてして観念的、抽象的な教義ないし教説の羅列に終始して、可もなく不可もなく迫力に欠ける、という弱点があるものである。ポーガツキも文体、体裁ともによく統一され、趣旨も一貫しているが、それだけに単調であることは否めない。

これに対して、この本はなにぶん三十年におよぶ長い期間にわたつてもなされた各種各様の著作の中から、任意に選び出された文章であるから、内容、文体ともに一様でなく、いかにも雑然としていて、不統一の感をまぬかれない。しかし、かえつてそのために、ふつうの日用祈禱説教集にはみられない変化と生氣にあふれていて、読む者につきない感興と深い感動を与えるのである。要するに、ここには著者内村鑑三その人が息づいている。その点で、これはきわめてユニークな日用信仰、文集なのである。

内容

この本の編集に用いられた著作は左の十三種である。（発行順による）

- 一、『キリスト信徒の慰め』一八九三年（明治二十六年）
- 二、『求安録』一八九三年（明治二十六年）
- 三、『伝道の精神』一八九四年（明治二十七年）
- 四、『宗教座談』一九〇〇年（明治三十三年）
- 五、『キリスト教問答』一九〇五年（明治三十八年）
- 六、『洪水以前記』一九一一年（明治四十四年）
- 七、『独立短言』一九一二年（明治四十五年）

- 八、『所感十年』一九一三年（大正二年）
- 九、『研究十年』一九一三年（大正二年）
- 十、『感想十年』一九一四年（大正三年）
- 十一、『旧約十年』一九一五年（大正四年）
- 十二、『復活と来世』一九一七年（大正六年）
- 十三、『研究第二の十年』一九二〇年（大正九年）

以上の表が示すように、その資料は、内村の生涯にわたる文筆活動の代表作である。内容的に言っても、『慰め』『宗教座談』のようなキリスト教に関する一般的な論述、『洪水以前記』『研究十年』のような聖書およびキリスト教に関する研究的な著作、それに『所感十年』のような感想文集のいずれをも含んでいて、内村の著作の傾向と範圍を余すところなく代表している。

この編集の時、内村は六十五歳、はじめてキリスト教に接してからほとんど五十年、独立伝道に従事してからすでに二十五年、その信仰も思想も円熟の域に達し、生涯の働きの実を豊かにかりいれつつあった。これはその意味で、内村の人と生涯、信仰と思想、事業と人生觀の集大成であり、内村鑑三の精髓はこの一書にありと言ってもけつしで過言ではない。人はこの一冊をひもどくことによつて、内村のほぼすべてを知ることができるであろう。

文章 この本は、もともと一日分を一頁に収め、一日に一頁ずつ読むように編集された。したがって、集められた文はすべて四百字前後の短いものである。引用は『所感十年』からが最も多くて六十六日分、『独立短言』『感想十年』（いずれも感想文集）からのものを合わせると百四十八日分にのぼる。それ以外の引用文も、抜粋ではあるが、主題的にはそれぞれ独立した短文である。しかも、どれをとつても著者会心の文章ばかりであるから、この本は内村の文章をも代表するものであると言つてよい。

そもそも内村の面目は、みずから「所感」とよんだ短文にあつた。それは、内村自身の説明によれば次のようなものである。

所感なり。真理の直覺なり。天国の瞥見なり。信者の朝の夢なり。ゆえに簡單なり。隨筆的なり。非研究的なり。されど淺薄ならざらんと欲す。研究の順路を示さずといえども、その熟し

たる果実ならんことを期す。所感なればとて必ずしも感情の発作にあらず。真正の所感は神の霊が人の霊に触るる時に生ず。ただ憾む、樂器の不完全なる、もつて天の美曲を完全に伝うるあたわざることを。(『所感十年』自序)

こうして生まれる内村の所感文は、簡潔、明快、断言的で、しかも説得的である。痛烈な論理をもつて鋭く迫るとともに、真摯に衷情を披瀝して切々と語りかける。けつして美文ではないが、内村独特の名文が、読む者の心をとらえてやまない。ひとたび内村の著作をひもどいた者が、忘れがたい感銘を受けるのもゆえなしとしないのである。

内村鑑三の思想と信仰

文と思想 『余はいかにして』の独訳者ウイルヘルム・グンデルトは、「内村はその筆と同じ人間である。彼は心臓で書き、生活で書いている」と、内村を評したという。内村にあっては、まさに文は人であった。内村は言う。

純潔なる思想は書を読んだのみでえられるものではない。心に多くのつらい実験をへて、すべての乞食的根性を去って、多く祈って、多く戦って、しかるのちに神より与えられるものである。これを活かすの思想の出産物とみなすのは、大なる誤謬である。天才は名文を作る、しかも人の霊を活かすの思想を出さない。かかる思想は血の凝結体である。心臓の肉の断片である。ゆえに刀をもつてこれを断てば、その中より生き血が流れ出るものである。ゆえにいまだ血をもつて争うたことのない者の、とうてい判断することのできるものではない。文は文字ではない、思想である。そうして思想は血である、生命である。これを軽く見る者は生命そのものを



信仰50年記念の日。左から広井勇、伊藤一隆、内村鑑三、大島正健、新渡戸稲蔵 (1928年6月)

輕蔑する者である。(四月五日項)

以下内村の「純潔なる思想」について、なるべくこの本に即して若干の解説を試みよう。

科学的合理主義

内村の思想を形成する三本の柱を想定しようとすれば、その一本はなんと

「科学の起原」が出版されているが、これは大きな暗合であった。この書は聖書とともに、内村が生涯手放すことのなかった愛読書であり、札幌時代内村をとらえた問題のひとつは、「キリスト教と進化論の係いかん」ということであつた。一月二十八日の項は、この問題に対する内村の解決を示すものであるが、これを単なる宗教と科学の信仰的調和と解してはならないであろう。

内村にとつて、科学は学問の一分野としての科学にとどまらなかつた。ものの考え方そのものが理性的であり(十二月五日項参照。以下参照としてあげるものは、いずれも一例にすぎない)、人生の生き方そのものが科学的なのである(五月二十日項参照)。たとえば不敬事件に関連して、勅語に対する真の敬礼は、形式的な最敬礼などにあるのではなく、勅語を実行することにこそありと論じているが、これなども内村の思考が近代的合理主義に貫かれていたことを示す好例である。晩年、内村は自分のキリスト教を弁明して、「キリスト教はいかにみても道理の宗教である」と言っている。

科学は事実を重んずる。内村はキリスト教信者としての生涯を通して、信仰の問題についても、この科学的態度を貫いた(十二月六日項参照)。キリスト教を近代科学の精神をもって受け入れた、といつてもよい。内村は入信当初から正統的クリスチャンであつた。しかし内村は、それを既成の教義として観念的に受け取つたのではなく、その生涯における具体的な出来事(事実)を、機縁として、ひとつひとつ実験的に体得信受していったのである(たとえば、ルツ子の死によつて天国復活の信仰を明確に把握したように)。そこに内村のキリスト教の独自の深さがあり、内村のことばのもつ力と生命の秘密がある。

ロマンチズム

内村のアマスト在学中のこと、おりからハーバード大学に留学していた宮部

金吾を訪ねたことがあつた。宮部の研究室で内村は彼にたずねた。「君には顕微鏡の下にヒューマニティが見えるだろうね」。返事に困って宮部は答えた。「そんなものは見えない」。それを



海保武松（右）とともに（1921年5月）

聞いて、内村はいかにも寂しそうな顔をしたとい
うが、その心情は、あらゆる現象の中に無限の可
能性を求めてやまない、ロマンチストのそれでは
ないであろうか（十一月二十四日項参照）。

このエピソードはまた、内村がいに自然を愛
する人であったかを物語るが、内村の天然愛は、
かの天然詩人ワーズワスのそれに通ずるものであ
り、ワーズワスは内村特愛の詩人であった。もし
てワーズワスが、これまた内村の愛したコレリッ
ジとともに、十九世紀ロマンチズムを代表する
詩人であることは言うまでもない。

内村は詩人の崇拜者であり（五月二十六日項参
照）、みずからもすぐれた詩人であった（四月一
日項参照）。『代表的日本人』に託してみずから
を語る文学的パトス、「泥酔詩人」ホイットマンに寄せる共感、『後世への最大遺物』に語られ
る肯定的、歓喜的的人生論、汎神論を解説する時の深い理解と洞察など、いずれも内村のロマンチ
シズムの表出でなくてなんであろう。内村のこの文学性を考えると、小山内薫、有島武郎、志賀
直哉、正宗白鳥らの文学者が、内村のもとに蝟集したのも首肯できるのである。

ヒューマニズム 内村は若き日（アマスト在学中）の日記の一節に、「日本もまた神の国民で
あるとは、なんと祝福と奨励とに満ちた思想ではないか」と記しているが、日本の精神的伝統に
内在する価値は福音といかにかかわるか、という問題が内村の終生の関心事であった。そこに、
福音が接木せらるべき台木としての武士道、あるいは儒教道徳に対する積極的評価があり、すべ
ては「キリストのため、国のため」という内村の愛国心の源泉があった。その意味で愛国は、内
村にとって愛神にひとしかつたのである（一月二十日項参照）。一月三日項の「初夢」と題する
一編は、愛国の詩人内村がその理想と幻をうたいあげた雄編である。

内村はアマスト卒業後、ハートフォード神学校に入学したが、神学や聖職者教育に堪えられず、わずか三か月で退学してしまった。そして神学者、聖職者としてでなく、あくまでもひとりのキリスト信徒として帰国し、生涯「平信徒」として生きぬいた。その伝道も平信徒の伝道であった。教会をつくらず（九月一日項参照）、弟子団を組織せず、教義や神学にとらわれず、いつさいの儀式に無頓着であった。実に内村は、既成の伝統的キリスト教の外にあって生きた人であった（一月三十一日項参照）。

「人は罪を犯すべからざるものにして、罪を犯すものなり」（一月十三日項）と喝破しえた内村は、深い同情の人であった。ひろい、あたたかい人であった。内村に愛され、内村を愛した人々たちによって語りつがれている、多くのエピソードが浮彫りする内村は、およそ宗教家というイメージとはほど遠い、最も人間らしい人間であり、紛うかたなきヒューマニストである（三月二十四日項参照）。内村の思想を支える三本の太い柱は、たしかにヒューマニズムである。

近代の否定 以上内村の思想を、近代ヨーロッパの思想を代表する三本の柱にたとえて概観してみた。そこに彷彿される内村鑑三は、まさに巨大な近代人ではなからうか。内村は近代日本の形成期に生きて、近代西欧文明の受容という大仕事を、みごとに成し遂げた巨人であった。しかし、これをもって内村のすべてである、と考えては大きな誤りである。なぜなら、おそらく近代日本において内村ほど鋭く近代人と近代文明を批判し、きびしく近代的自我を断罪した思想家はないであろうからである。

他の多くの明治の先覚者たちとちがって、西欧文化を、ただそれだけでなく、その根底をなすキリスト教とともに受容した内村は、当初から互いにまったくあい反するものを、そのうちに蔵していたのである。そこに内村の生みの苦しみがあつた。そして内村は、彼自身の言うとおりに「心に多くのつらい実験をへて、すべての乞食的根性を去って、多く祈って、多く戦って、しかるのちに神より与えられた」ものに生きるに至つた。その「純潔なる思想」こそ、みずからの骨太な近代的性格と、その生涯をかけた事業のいつさいを否定し、放棄し、さることを迫る、内村のキリスト教である。

近代の否定は自我の否定である。人間的ないつさいのものの否定である。「理屈を述べず、義

理を立てず」（九月十四日項）して、偉大なる神の前に平伏することである（五月一日項）。この深刻、強烈な「ノー」のゆえに、文学者をはじめとする多くの近代人が、内村につまづいたのもまたやむをえぬことであつた。

キリスト信仰 まことに内村の本領はこの一点につきる。内村は他の何でなくとも、神とキリストのみに仕えるキリストのしもべであり、贖罪くぐわいの信仰に生きた最も正統的なクリスチャンであつた。そのキリスト教は「キリスト教はキリストである」（十月二日項）とするキリスト中心の、キリストをすべてとするキリスト教であり（六月二十日項参照）、イエス・キリストの十字架の血によつて罪を許され、義とされることを信ずる、きわめて福音的なキリスト教である（四月十五日項参照）。

内村の信仰が、徹頭徹尾聖書に基づく信仰であることは言うまでもない（十二月十五日項参照）。内村こそは文字どおり聖書一冊に生きた人であり、日本独特の、おそらく世界にもまれな、聖書の研究による聖書の伝道という、純然たる聖書のキリスト教を始めた人である。また、「キリスト教は宗教にあらず」と断じた内村は、けつして宗教的熱狂者ではなかつたが、一方その信仰は神秘的とも見えるほどに単純、大胆であり（四月二十一日項参照）、来世（五月十七日項参照）、復活（二月二十二日項参照）、奇跡（十月十三日項参照）、審判（十二月八日項参照）、三位一体さんみいつたい（二月十六日項参照）などの古い信仰に堅く立つてゆるがなかつた。

楕円の真理 内村最晩年の講演に「楕円の話」というのがある。内村によれば、真理は円形ではなく楕円形である、すなわちその中心は二個であつて一個ではない。いまこの論理を、これまで述べてきたところにあてはめてみるならば、内村の近代性を一つの中心に、そして内村のキリスト教をもう一つの中心に擬することができよう。この二つの中心の周囲を回転する楕円のダイナミックスは、激しい精神の相剋と、霊的葛藤の絶えざる緊張である。内村に矛盾が多いと言われるのは、むしろ当然であろう。とまれ内村は「何事によらず円満と称して円形を要求する」小人のごとくでなく、この楕円の真理に最後までじつと耐えぬいた。それを支えるものは、イエスに対する熱い愛と、聖書に対する絶対の信頼であつた。ここに内村の信仰のダイナミズムがある。

七十歳、死を直前にしてみずからの唱道した無教会主義を否定することのできた強靱な精神と自由への渴仰——これをしても真の無教会主義というのであろう——（一月十八日項参照）、この世のいっさいのものとの相対化に由来する独立の気概（四月二十四日項）と謙虚な生き方（三月二十七七日項参照）、預言者の厳しさの中にほのぼのとただようユーモア（九月二十五日項参照）。これらはいずれも、この信仰のダイナミズムの所産である。

楢田の真理、すなわち内村の別の言葉でいえば「二元論のキリスト教」の満々たる世界に生きた内村は、「意志の深底より世と世のすべてを捨てさりてのち」、キリストの恵みによって世と世のすべてをおのがものとなしえた人であり（八月三十日項）、この破壊を恐れぬ人生の戦士は（五月三十日項）、またキリストの平静に憩う絶対的満足の人であった（七月二十日項参照）。

偉人は時代の産物であるとともに、時代を越えて生きる。内村はまぎれもない近代の子であるとともに、近代を超越した精神界の偉人であった。いかにも近代的装いをこらしながら、内村はいまだに多くの非近代的要素を払拭しきれずにいる日本において、またキリスト教的ヒューマニズムが、故意にか錯覚でか、キリスト教そのものと混同されているかに思われるこんにち、内村の近代日本における思想的意義はきわめて大きいものがあると言わねばならない。

付記

- 一、本文庫版の聖句は口語訳を用いた。
- 一、本文庫版の校訂および書きかえは『一日一生——内村鑑三生誕百年記念版』（山本泰次郎編、教文館、一九六〇年）によった。
- 一、掲載写真については、斎藤茂夫氏の協力を得た。

（所載）内村鑑三『一日一生』一九六九年一〇月 角川書店